

(短報)

## 博物館情報の国際化

カンタベリーで開催された「データ標準化ヨーロッパ戦略会議」に参加して……

Internationalization and Standardization of Museum Data.

水嶋英治

Eiji MIZUSHIMA

はじめに

1991年9月2日から6日までイギリス中世の街カンタベリーで、博物館を所有するコレクション情報を国際的に流通させるためのデータを統一し、このデータの標準化を図ろうというヨーロッパ戦略会議が開催された。

最近ではコンピュータを利用して資料管理を行う博物館や美術館が増加してきたため、更に一步進めてネットワーク化によって情報交換しようというニーズも出てきている。

EC統合にあわせて、博物館データの統一仕様を定めておけば、今後の博物館活動にとってメリットの方が大きいのではないかと期待もある。ここでは、最近の動向を含めてご紹介したい。

### ◆会議の内容

この会議の主催者はケンブリッジに本拠地を置くミュージアムドキュメンテーションアソシエーション(MDA)、日本流に言えば「博物館情報資料管理協会」である。

この協会では、大なり小なり博物館に関してのセミナーやシンポジウムを企画し、毎年恒例的に開催しているが、今年のテーマは「博物館ドキュメンテーション管理とデータ標準化…ヨーロッパ戦略」であった。

この会議に参加したのはおよそ200人。ヨーロッパ主要博物館の代表者はもちろん、地方都市の博物館関係者も顔をそろえた。都市の数にして84都市。データ標準化にむけてのヨーロッパ戦略を展望しておこうとアメリカ、カナダ、オーストラリア、アジア諸国からも参加し、結果的には国際会議となった。

会議の内容は、

1. ヨーロッパ各国の文化財、博物館コレクションデータベースの現状報告
2. データ標準を定めた場合、現在進めている共同プロジェクトの今後の方向性と軌道修正
3. 既に存在している各館のコレクションデータベースと新設されるデータ標準との整合性をいかにとるか、というものであった。

しかし、議論の中心はやはりプロトコル設定にあたっての基準はどのように設定されるべきかという一点に尽きていた。

### ◆各国の動向

この協会は博物館資料の管理方法の統一化を図り、1960年代からイギリス国内で地道な研究活動を続けてきた。実は、3年前の1988年に「博物館のターミノロジー(用語統制)」という国際シンポジウムがケンブリッジで開催され、各種各国の博物館から資料管理の際の用語統一の問題が浮き彫りにされた。

このシンポジウムを契機に、博物館のコレクションデータを標準化しようという動きが出てきたのである。

この会議の開催を呼びかけたのが、標準化の理論的アプローチを十余年研究を続けてきたMDAである。まずイギリスを中心にヨーロッパ諸国を基盤にしてデータの標準化をおこなうというのがそのヨーロッパ戦略会議のシナリオであった。データ標準も国際標準化機構(ISO)の2709号に従うというのも世界戦略を考慮してのことであった。

これに「待った」をかけたのがアメリカである。イギリスを中心にしたヨーロッパ勢力に対して、技術的なレベルでデータの標準化の道を開き、その主導権を握ろうとしているのがアメリカ・カナダ勢である。

アメリカでは1988年に博物館コンピュータネットワーク機構が提唱し、昨年(1991年)の10月にリッチモンドで第一回の『博物館情報コンピュータ・インターチェンジ委員会』が開催された。この委員会の目的は、やはり博物館情報のデータ標準化を図り、コレクション情報の検索能力を向上させ、研究者や専門家のためだけでなく、一般の人々のためにも文化財情報を広く流通させようとして設立されたのである。

むこう3年の間に、データ標準化にむけて技術的仕様の枠組みを決定し、コンピュータで通信する際の約束事や手順を決めたプロトコルの草案準備に取りかかり、現在、法的な手続の検討に入っている。

1992年にカナダのケベックで開催されたICOM大会にむけて、ヨーロッパと北アメリカ両大陸の博物館先進諸国が綱引きをおこない、水面下で見えない戦いを繰り広げた。プロトコルを設定することは今後のイニシアチブを握れるだけに、熱い論争が続くそう。

#### ◆博物館のデータ標準

博物館のデータ標準とは、簡略して言えば、資料名・作品名、資料の大きさ・形態・保存状況、歴史的背景などのデータをコンピュータに登録するときのルールとその約束ごとである。

コーヒーを入れる際、使うフィルターが粗すぎると、挽いた豆粒がこぼれてしまうが、反対にフィルターが細かすぎると、網目につまって時間がかかり過ぎてしまう。

情報検索もこれと同じで、粒の大きさに合わせた適当なフィルターが望ましいということになる。このフィルターの役目を果たするのがデータ標準である。

各国で用いる博物館資料やデータに関する用語や「標準」が国ごとに異なっているのは、検索するにも不必要な情報が検索されてしまい、効率的でなくなってしまう。できるだけ誰でもが使えて、分かりやすい標準を設定しておくことが、データ標準として淘汰されずに最後まで生き残ることになる。

図書館の世界では、以前から『英米目録規則』が標準的に利用され、内外問わず文献情報の学術情報ネットワークなどがサービス・運営されている。しかし、博物館の世界ではまだ基礎的なデータが標準化されていないのが現状で、したがってネットワー

ク構築も今後取り組まなければならない重要課題のひとつである。

#### ◆各国の博物館データ標準

現在、使用されている各国の博物館データ標準には、英国の博物館資料協会の提唱する「標準データ」、フランスの「目録規則」、スイスの「国定文化財データベース入力情報基準」、国際博物館会議ドキュメンテーション委員会(CIDOC)作成による「美術データ標準」などがある。これほど標準があったのでは「標準」ではなくなってしまふ……、そんな危惧からこの会議が開催されたのも事実である。

この会議が開催されたもう一つの背景には、最近議論が高まっている環境問題も大きく影響している。たとえば、酸性雨の影響によって、屋外に展示されている産業考古学的遺産などの鉄鋼部分の腐食の進行が急速に早まったり、環境変化による石造建築物・文化財の黒色変化など、博物館資料にとっては危機的状況にあると専門家は見ている。

仮に博物館の資料に関してそのデータが標準化されて、各国の研究者や専門家に情報が提供されれば、ひいては人類の貴重な歴史的財産の保存に役立つことは多言を要すまい。

#### ◆結語：標準化への道のり

しかし、社会的・世界的な合意がなければ、標準化への道のりは厳しいであろう。「標準」とは、一種のコンセンサスなのだから……。もちろん、各国それぞれのお国の事情によって、ヨーロッパのみならず国際レベルでの「統一仕様」づくりにはまだまだ時間がかかる。が、データの標準化によって、カンタベリーでのヨーロッパ戦略会議がひとつの起爆剤となって、また新たな情報展開の第一歩が始まることは確実のようだ。

ちなみに、わが国でも世界情勢をにらみながら、博物館のデータの標準化を図ろうと、1991年から図書館情報システムの専門家と協力しながら『博物館データ標準化研究グループ』が科学技術館のなかに遅ればせながら発足した。

技術の世界では最先端を走る我が国であるが、文化行政の面でも後れを取らず博物館データの標準化にむけての今後の議論、研究が強く望まれている。

---

ヨーロッパの博物館およそ1万館のうち、およそ10%が資料管理のためにコンピュータ化を図っているが、残り90%の館はむこう10年間でコンピュータ化されるであろうとの予測もある。その意味では、この会議はまさに時宜を得ていたと評価できよう。近い将来、データ標準が確立されて、どこの館からでも、あるいは家庭からでもオンラインで世界の博物館情報がアクセスできれば、今ある以上に博物館の巨大な知的情報ソースは有効に利用されるに違いない。夢のような話であるが、世界レベルで情報が共有化されるのもそう遠いことではない。